日本と海外の水道技術者が合同研修

JICA 国際協力人材の育成図る

国際協力機構（JICA）は昨年11月、2週間にわたり、東京センターで2025年度課題別研修「水道管理行政及び水道事業経営B」とJICA能力強化研修「水道」コースを実施した。途上国の水道事業体職員を対象とする課題別研修と国内事業体職員の国際協力スキルの向上を図る能力強化研修を合同で行うもの。研修の計画・実施は国際厚生事業団（JICWELS）が担当した。

国内9水道事業体からの日本人参加者は、グループワークや意見交換を通じて途上国の水道事業に関する知識の習得や国際コミュニケーション能力の向上を図るとともに、ペアワークで海外研修員の事業改善案作成に協力した。▽ヨルダン▽ラオス▽パレスチナ▽ルワンダ▽南スーダン▽ウガンダ▽バングラデシュ―の7カ国から来日した8人の海外研修員は、顧客対応や料金収納、無収水対策、漏水調査、水安全計画策定等について学ぶとともに、日本人参加者とともに帰国後に組織内で共有できる事業改善案の策定を図った。また、水資源機構の秋ヶ瀬取水堰、東京都水道局の朝霞浄水場、富士市上下水道部の水源地や配水池といった施設の視察を実施。森田鉄工所のバルブ工場視察やフジテコムでの漏水調査体験も行った。

閉講式に集まった研修参加者と関係者（11月）

漏水調査体験の様子（９月）

研修最終日に開かれた閉講式では、海外研修員を代表して南スーダンのマジョック・ドゥット・サミュエル・ドゥオム氏が「我々は多様な背景を持つが、それぞれの地域の水へのアクセスや持続可能性を向上させるという決意は共通している。研修を通じ水道システムへの理解を深めるだけでなく、日本の持つ重要な水資源の効果的な管理能力を学び、今後の活動を形作る経験を得ることができた。これを継続的な協力と革新の始まりとしたい」と述べた。

日本人参加者を代表してマジョック氏とペアワークを行った谷口久美子・東京都水道局研修・開発センター研修課課長代理は「海外の水道において日本のどのような技術が役に立つのか知りたいと考え、研修に参加した。日本の技術力を再認識するとともに、現状で満足していてはいけないとも感じた。都に戻ったらさらに自己研鑽をしていきたい」と話した。また、岩崎昭宏・JICA東京センター次長は「この2週間は長く続く友情の始まりとなる。帰国後の活躍を期待している」、片岡佳和・JICWELS専務理事は「研修の思い出が忘れられないものとなり、参加者同士の友情が長く続くことを心から願っている」とメッセージを送った。

研修を振り返り、JICWELSの田中健夫・技術参与は「地域も言語も抱える課題も異なる人々が同じ環境で学び、お互いの気づきを共有した。これから拡張時代を迎える国の事業に触れることは、維持管理時代の日本の技術者にとっても良い刺激となったと考えている」と話した。

JICAとJICWELSは9月にも課題別研修「水道管理行政及び水道事業経営A」を実施している。ここでは▽カンボジア▽東ティモール▽パキスタン▽ソロモン▽アンゴラ▽モザンビーク▽スーダン▽バングラデシュ―の8カ国から来日した研修員が、講義や演習、施設視察等を通じて事業改善案の策定等について学んだ。研修員からは「施設視察で見た遠隔監視システムによる自動運転や継続監視、取水工程の砂分離装置が印象的だった」「日本の技術の根底にある予防保全・効率性・透明性の原則は我々の国でも基本的なレベルで応用できると思う」「メーカー工場視察では厳格な品質管理と一つひとつの信頼性・耐久性を確保する最新技術の活用が印象的だった」「漏水検知や水道管の埋設深度計測が可能な装置は興味深く、自国での活用もイメージできた」「研修を通じ、自分たちの現状や目指すべき方向を知る良い機会となった」といった声が寄せられた。